

令和7年度 研究開発学校実施計画

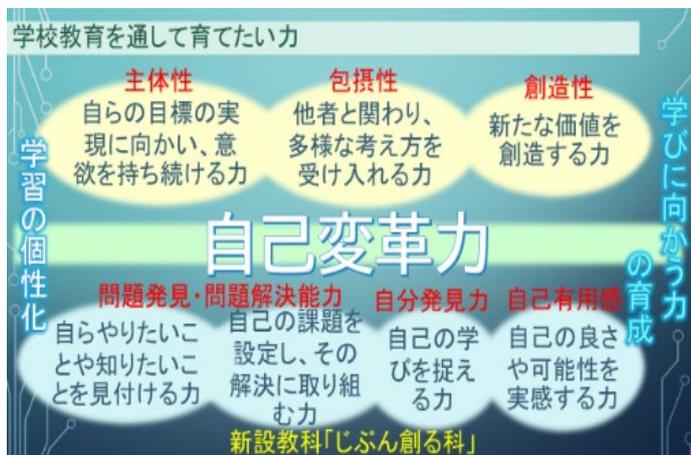
1 学校教育を通して育てたい資質・能力

将来が予測困難な時代において、持続可能な社会の創り手となる子供たちが、主体的に課題を解決し自己実現をかなえる学びの機会が必要不可欠である。

また、国立教育政策研究所「OECD 生徒の学習到達度調査（PISA2022）のポイント」では、【自律学習を行う自信について】の項目で、日本は調査対象37か国中34位であり、平均を下回る結果となった。分析資料の中には「変化の激しい社会を生きる子供たちが普段から自律的に学んでいくことができるような経験を重ねることは重要であり、自律した学習者の育成に向けた取組を進めていく必要がある。」と述べられており、子供の主体性を前提とした自律学習の重要性が浮き彫りとなっている。

こうしたことから、子供自身が「なりたい自分」を思い描き、その実現に向け、今の自分にとってどのような力が必要かを考え、自己の学習を調整しながら主体的に課題解決に向かい、今の自分を変えていくとする「自己変革力」を育てていく必要があると考える。

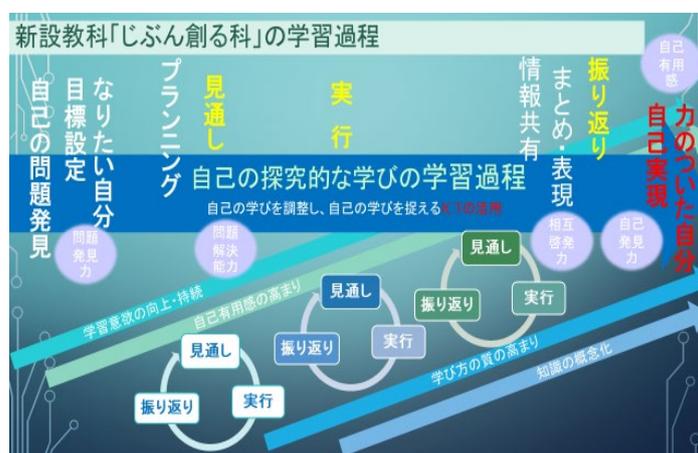
西の台小学校において、現行の学習指導要領の各教科等における指導内容は履修しつつ、一人一人の能力や興味に合わせた学習過程を重視し、より子供の学習意欲を高め、自己実現をかなえるための「時間や場の設定」と「学び方の習得」を兼ね備えた新設教科の設定を行う。



2 新設教科「じぶん創る科」

本研究では、これまでの学校研究を通して培ってきた協働的な学びを生かし、様々な子供の教育的ニーズと自己実現をかなえるため、新設教科「じぶん創る科」を設置する。この新設教科では、自己調整学習の考え方を取り入れ、子供自身が設定した課題の解決に向けた「自己を知る」「プランニング」「実行」「自己の学びを振り返る」の学びのサイクルを位置付け、探究的な学習活動を推進していく。

現行の総合的な学習の時間とは違い、学校が設定した課題の解決に向けた授業ではなく、教師が「コーディネーター」としてどのように子供たちの学びの道筋をコーディネートし、支援する指導方法の工夫改善や、課題設定と課題解決への持続力につながる動機づけや評価の在り方についても検証し、子供の自己実現に向け、あらゆる課題解決に向かうための「学び方」を習得し、自己変革力の育成を目指す。



【「じぶん創る科」の目標及び内容（案）】

○目標

未来に向かい、夢や希望、憧れる自己をイメージするとともに自己実現に向けた必要な力（資質・能力）に気付き、探究的な学びの過程を通し、自己の学びを調整しながら学びの質を高めていく自己変革力を育成する。

<主として育成を目指す資質・能力>

〔主体性〕 自己の目標の実現に向かい、自ら粘り強く学習に取り組むことができる。

〔包摂性〕 探究的な学習過程の中で他者と関わり、多様な考え方を受け入れ、自己の学びに生かすことができる。

〔創造性〕 学習を通して自己の知見を深め、新たな価値を創造することができる。

「じぶん創る科」(自己変革力を高める)における発達段階

学びのサイクル	自分のやりたいことを実現する時期(1~3年)	自己を見つめ、なりたい自分を実現する時期(4~6年)
振り返り (メタ認知)	○自己の学びを振り返り、自己を知る。	○自己の学びを振り返り、自己を変革する。
実行	○教師の支援を受けながら、学習を実行・調整する。	○学習を実行・調整する。
プランニング	○教師の支援を受けながら、学習をプランニングする。	○自己の課題を解決するための学習をプランニングする。
自己を知る (メタ認知)	○興味関心や学習経験から「自分のやりたいこと」を見つける。	○「なりたい自分」に向けた自己の課題(資質・能力)を設定する。
学びのサイクル	教師の支援を受けながら学びのサイクルを学ぶ	より自己変革の学びを高めていく
	<p>【興味関心】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・絵が上手になりたい。・ダンスを上手になりたい。 <p>【教科の学び】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・算数科「はこの形」で、もっと大きな城を作りたい。 ・生活科「あきみつけ」のどんぐりで何か作りたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・アナウンサーになりたい夢を叶えるために表現力を高めたい。 ・世界の課題を解決できる人になるために、地域の問題を解決する力を高めたい。 ・自分は文章力が足りないな。

具体的な実践としては、小学校6年間の発達段階を考えると、自己形成や自己理解が未完であると考えられる第1学年から第3学年前期までを「つなぐ・はっけん（自分のやりたいことを実現する時期）」とし、各教科等の学びや自分の興味関心と関連させた探究的な学習を進め、学びのサイクルを習得していく。その際、探究的な学習のスパンが短いものを繰り返し行うことを認め、「自己を知る」「プランニング」「実行」「学びの振り返り」の学習サイクルを経験させ、子供の「やってみたい」「できた」の成功体験や「うまくいかなかったので、〇〇でやってみたい」という学習過程の修正体験も体感させていきたい。

また、第3学年後期から第6学年までを「挑戦・創造（自己を見つめ、なりたい自分を実現する時期）」とし、自己の現状を俯瞰的に把握し、「なりたいじぶん」をイメージする中で、その自己実現に向け、自分にとって必要な力を設定し、その力を修得するために「どのような内容」で「どのように学んでいくか」をプランニングさせる。その際、教師は子供が見通しをもって学ぶことができる学習環境の整備に努めていく。

以上の通り、本研究においては、研究課題である「一人一人の興味・関心に応じた学びの充実のための弾力的な教育課程編成」のために、新設教科「じぶん創る科」を中核としたカリキュラムの構築に向けて研究を進めていく。

3 教育課程の編成

これまでの教師主導の一斉学習から学習者（子供）主体の学習活動へと展開するためには、子供自身が自分を見つめ直したり、様々な人・もの・ことに視野を広げて考えたりする時間や教師が子供の学習を見取ったり、主体的な学習活動を生み出したりするための教材研究や協議する時間などの生み出しが欠かせない。そのために、教育課程の編成を行っていく。

<具体的な授業時数の変更への対応案>

- ・必要授業時数の洗い出し

これまでの授業時数を見直し、学習指導要領に準じた指導事項とその定着に向け教科の特質、発達の段階、学習活動上の効果的な1単位の授業時間の在り方、協働的な学びを充実するための一斉授業を担保するとともに、必要授業時数を算出する。

- ・柔軟な授業時間（40分授業や30分授業等）の実施

1単位時間を40分や30分とすることで、標準授業時数を下回る教育課程を編成し、生み出された時間を新設教科の充実で充てるとともに、教師の研修や授業改善のための時間を確保する。特に、低学年においてはスタートカリキュラムを見直す中で、1単位時間の柔軟な設定を行っていく。

- ・学校行事の精選と年間指導計画におけるカリキュラム・マネジメントの実施

- ・新設教科「じぶん創る科」における年間実施計画の作成

- ・低学年における生活科、中学年・高学年における総合的な学習の時間の全削除と各教科等から全体的に授業時数を削減し、新設教科「じぶん創る科」における授業時数を十分確保する。

4 総合的な学習の時間の充実（子供たちが探究サイクルを経験する）

新設教科「じぶん創る科」の実施に向けて、子供たちが学びのサイクルを自分で回す素地を作るために、総合的な学習の時間における探究のサイクルを自分たちで回す経験をする必要がある。総合的な学習の時間の探究活動が探究の過程になっているのか見直し、総合的な学習の時間の充実を図る。また、総合的な学習の時間だけでなく、生活科についても協議し、子供の興味・関心に基づいた学習や願いの実現に向けた学習の充実を図る。

5 自己調整学習の理論研究（教師が理論や学びのサイクルを学ぶ）

新設教科「じぶん創る科」の実施に向けて、教師が自己調整学習について学び、子供たちが学びのサイクルを自分たちで回していくことができるようにするためにどのような支援や学習計画が必要なのかを理解する。自己調整学習の理論を専門に研究されている大学教授をお招きし、ご講義いただきながら研鑽を積んでいく。

6 ICTの活用（ダッシュボード）

さらに、本研究における学びのサイクルでは、ICTの活用は非常に効果が高いと思われる。特に「自己を知る」では学習状況・成果を記録し、学びを履歴として蓄積した様々な自己の情報（各種テストや学級集団検査、hyper-QU、体力、学習意欲等）をもとに、「なりたいじぶん」を描いたり自己実現に向けたプランニングしたりすることで充実したものになると考える。

個人の端末にて一括管理・集約ができ、子供・教師・保護者と学びの蓄積が共有できる大分市独自のダッシュボードの開発に取り組み、本校の実証研究を通して効果的な活用についても検証していく。

7 育成を目指す資質・能力を測る指標の検討

育成を目指す資質・能力を測る指標を設定し、それらを測る方法（アンケートや子供の学びの見取り等）を検討していく。